

# 遊びの中から 得る育ちとは

ひらがなのツリーほいくえん

---



## 育ちは継続的な保育の中から

育ちの基礎を育むとは何だろうか?と立ち返った時、やはり乳児期から幼児期へと継続的な保育を実践し、発達の連続性に合わせた援助と環境を整えていくことが私達保育者の役割なのではないかと感じた。どこまで連続性を意識し、その時期に必要な保育が実践出来ているのか、園全体で今までの保育を振り返りながらそれぞれに考えてみる良い機会に繋がると考えた。

まず、園の特色でもある46色のひらがなに着目してみた。今年度の園の年間テーマは「色とりどりのひらがな」であり、ひらがたと聞くと幼児クラスが中心になると思ってしまうがちだが、色や形として捉えていくと、乳児期でも出来る活動があることに気が付いた。乳児期に展開していく保育内容が、幼児期の子ども達がひらがなに興味を示すきっかけにどのように繋がっていくのだろうか。実践を通して職員間での学びをしていきたいと思った。



## 子ども達の興味関心を引き出しながら、 沢山の色や形に親しむ

子ども達が「やってみたい」と心が動くような環境設定を意識した。

①0・1歳児では五感を十分に使って遊べるよう、様々な素材や異なった感触、形の玩具を提供し、散歩先等で自然物に親しめるようにする。

②2歳児では、手作りしたカードを使って色と形を探す遊びや、同じ種類の玩具を色分け出来る箱を設置する等、更に沢山の色や形と触れ合えるようにした。



③3歳児では、塗り絵台紙の種類を増やし細かく塗り分けする経験が沢山出来るよう促した。



④4歳児では色の混ぜ合わせ表を使用し、絵の具を使って複数の色が混ざり合うと色に変化する活動を取り入れ、自分なりに新しい色を作ることを楽しんだ。

⑤5歳児では、園内に飾られている46色のひらがなの色の名前を465色の色の表と照らし合わせながら調べ、形や書き順を意識しながらひらがなで紙に書き移している。

## 実体験を通しての子ども達の変化

①0・1歳児は身近な物に興味を持ち、発見を繰り返す行動に保育士等が共感する事で行動範囲が広がり、同じ形や素材の物を集める子や赤や青等の色が分かる子も出てきた。

②2歳児では色を分けて玩具を収納する事で、色を意識ながらブロックを組み立てる姿や、カード遊びによって簡単な形の名前を知る機会にもなった。

③3歳児では、枠の中を単色で塗りつぶす子が多かったが、絵本や散歩の道中で様々な物やその色の違いに触れることにより、何色も使って塗り分ける事が上手になってきた。



④4歳児は絵の具を使った活動の最中、目を輝かせていた。活動後には色の混ぜ合わせ表を見ながら「赤と青は紫になるんだよ」と保育士等や友達同士で教え合う姿が見られた。今まで知っていた色だけではなく、絵の具の量を少し変えるだけで違う色合いが出来ることにも気が付いたようだった。

⑤5歳児はひらがなの色探しを通して、元々知っていた色を除くと32色の新しい色の名前を知ることが出来た。活動を行う前には30色程認識している色があった為、計62色もの色の名前を覚えたことになる。また表の中で発見した虹色については、子ども達の中で、虹色は7色だと思っていたが、実はピンクの仲間だったという新しい発見もあった。



## 育ちの基礎を育むとは

乳児期に多くの感触や沢山の色に触れさせてあげる事で、色彩感覚が育まれると共に感性が磨かれていくと言われています。また、幼児期に多くの色を見てきた子は多面的な視野が育ち、物の微妙な違いを観察することや、想像して物事を考えることも得意になるとも言われており、今回46色のひらがなに沿った活動を実践したことで、まさに自園の環境は子ども達の能力を伸ばしてあげる為にとっても適していると再確認するきっかけにもなりました。



子ども達は今回の様な実体験を通して少しずつ成長を積み重ねていきます。だからこそ、子ども達の発達段階を学び、より理解を深めていくこと、そして園内での情報共有をより密に行い、全職員が各クラスで実践している保育内容や子ども達の個々の様子を把握できる時間を意図的に設けていき、新年度を迎えるたびに保育が途切れてしまわないようにしていく事が私達保育者の役割なのだと再認識しました。